

日常生活自立支援事業におけるソーシャルワーク実践研究
～持続可能な事業にする為の事業マネジメント～

○発表者名 社福) 八頭町社会福祉協議会 相談員 松原 勇作

1. 問題提起

日常生活自立支援事業（以下、「本事業」）は、単に金銭管理サービスを行う事業ではなく、判断能力が不十分な人であっても、自己決定に基づく適切な権利行使ができるよう意思決定を支援することや、世帯全体が複合的な課題を抱えている場合の契約者本人に限らず家族を必要なタイミングで専門機関へのつなぐことなども当事業が果たすべき役割としており、今後一層質の向上が求められているところである。

一方、実際の現場においては、金銭管理の支援に大きなウエイトが置かれてしまい、その先の意思決定支援など自立に向けた事業運営が十分に出来ていないのではないかと感じることもある。さらに、本来求められる役割を十分に果たすことが出来なければ、本事業自体が衰退してしまい、事業の存続が困難になってしまうのではないかと、それは、本事業の実施主体である社会福祉協議会（以下、「社協」）の存在意義にも関わってくる重要な課題なのではないかという危機感を抱いている。

2. 目的

本研究は、本事業の運用が、金銭管理の支援に大きなウエイトが置かれてしまっている可能性があることや、求められている役割を十分に果たすことができていない可能性があるのではないかと、という仮説をもとに、本事業の現状、課題を調査・分析し、本来求められている役割を果たす為に専門員としてどのようなことが必要であるかをまとめるとともに、実践者として、事例の取り組みを振り返り、本事業の役割を果たすことができていのか検証・考察するものである。

3. 方法

① 本事業のおかれている現状・課題及び課題解決に向けて必要なこと

第1部において、鳥取県内の社協の専門員を対象に本事業のニーズや実践できていること、課題のアンケート調査を実施した。アンケート調査の結果と合わせて先行研究等の文研調査を行い、課題を分析し、課題解決に向けて必要なことについても考察した。

② 実践事例研究

第2部では、実践事例を振り返り、事例を通じて本事業の役割を果たすことができていのかどうかを検証・考察した。

4. 成果・課題

第1章では、本事業のおかれている現状として、十分に本事業の求められる役割が果たせなければ、図1のような悪循環に陥ってしまう可能性があり、その中核には事業マネジメントの視点をもって運営することができていない、という課題があることに気付いた。そこで事業マネジメントの視点をもって悪循環を良循環に変える為に、実施すべきことをサブシステムとして考案し、サブシステムが機能した際の良循環を考察した。このように課題を構造的に捉えて、役割を果たす為には何が必要かを論じた。

第2章においては、実践事例研究を実施。本事業の利用者が車の購入を目指して少しずつ、ステップアップし、最終的には車の購入という夢を実現した事例を振り返った。ソーシャルワーカーとしてステージごとにどのような働き

かけを行っていたかを検証し、効果的な支援の為に必要なことを考察するとともに、事例を通じて本事業に求められる役割を果たすことができたかを考察した。本事業において事例をマネジメントすることができれば、対象者の自己決定や自立につながり、その先には夢の実現まで伴に体感させてもらえることができる事業である、ということを知ってもらう機会にもなったと感じている。

本事業は社協にとって大きな柱にもなりえるが、見誤れば社会福祉協議会にとって、お荷物事業にもなってしまふ。そんな両側面を持っている事業である。本事業の唯一の実施主体として認められている社会福祉協議会として、この事業をどう捉えて、どうマネジメントしていくべきか、ということに一度立ち止まって考える機会が必要だと感じている。

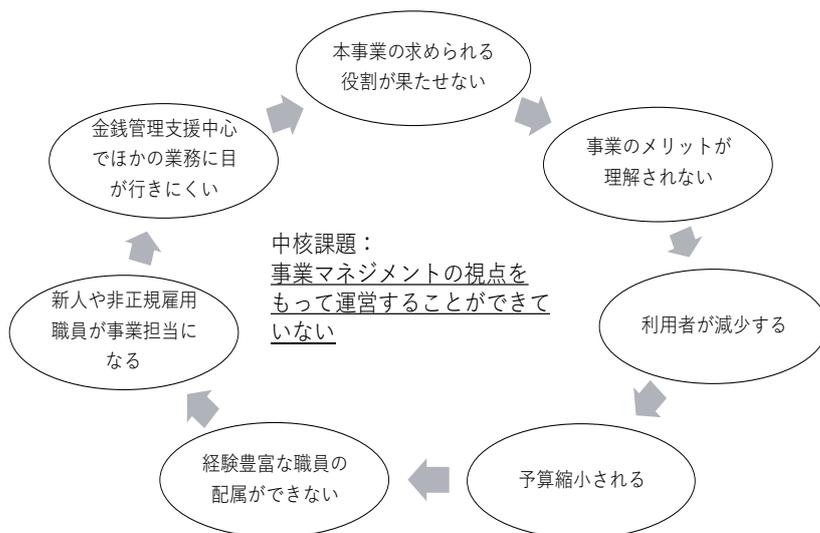


図1 本事業の課題の悪循環と中核課題

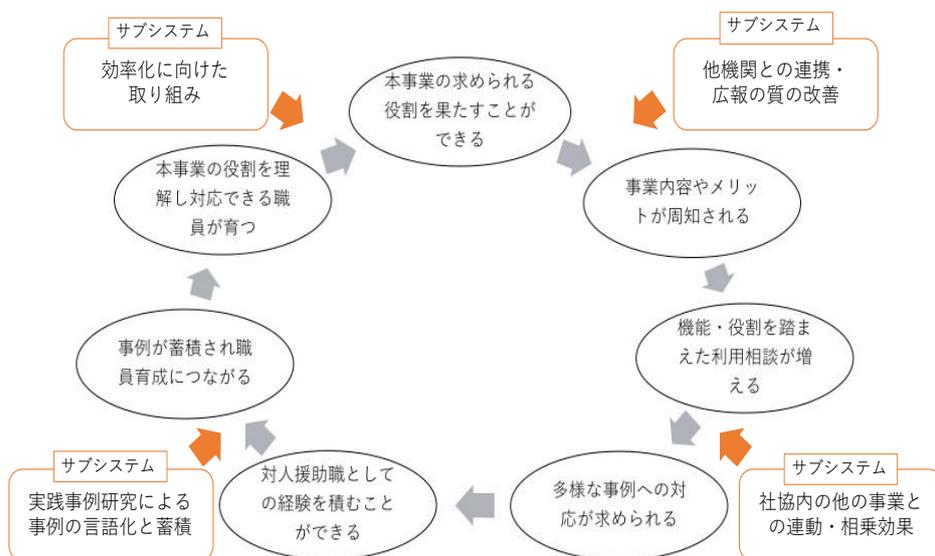


図2 サブシステムが機能した際の良循環